

第七章 宇宙大の自己

そういたしますと、次に覚りとしての自己は宇宙大であるという事をお話しいたしとうございます。

今、私共に見えております眼界は私共の心であります。神経系統は幻燈機械のようなものでありまして、機械は此処ここにありますけれども、心は必ずしも内ではない、外にできるのであります。眼などは特によく似ております。光が眼球の裏側にある網膜に小さな実像を結びます。それをそこに来ております神経が、その報告を後頭葉中枢にもたらしめると、注意が喚起されて、その注意のおもむく先方に種々と物が見えるのであります。皆様にはこの一場の光景がお見えになっております。この眼界は皆様のお心であります。また一面から見ますと、そっくりそのまま見る主としての自己であります。

どうか急に何処どこかあちらの方に眼を転じて頂きとうございます。そういたしますと、その時の眼界はやはり別の中味を持った皆様の心であり、そのまま見る主としての自己であります。けれども、いかがでしょう

か。前に見ていた時の眼界は全部見る主、聞く主としての自己であつたが、眼を転ずる時に、その見る主、聞く主としての自己が、スツと頭の中に入って、それがまたスツと出て、次の眼界に現れるのでありましようか。どうか事実をしかと擲んで頂きとうございます。いかがですか？ 眼を転ずる時、見る主としての自己がスツと頭の中に入って、それが次の眼界に出て現れるのでありましようか。そんな事ありませんナ。私共が野原や道を歩きます時に眼界が広がっております。それで歩いて行きますごとにスツと頭の中に見る主としての自己が入つて、また次の眼界に現れるのではありません。

そういったしますと、私共は見る主、聞く主としての自己を至る所に置き去りにして来るのでありますナ。でありますから見る主、聞く主としての自己は何処にもあるのだということになります。こちらを見ております時、こちらに見えているのは確かに自分であるけれども、あちらを見ます時、それは自分でないとおつしやいまいしょうか。そんな事ありませんナ。こちらを見ている時、この光景が覺つている。その自分にあちらの光景も覺るのであります。でありますから、前を見て、おります時、後にも見る主、聞く主としての自己があるのであります。私共は家を出まして此処まで参ります途中、汽車の窓から野や、山や、川など、種々な光景を見て参りました。これらは悉く見る主、聞く主としての自己であつた訳であります。見る主、聞く主としての自己は実に宇宙に遍在して余す所ありません。

科学がもつともつと発達しまして、引力、斥力などを自由自在に利用して宇宙を飛び回る飛行機ができたとします。酸素を一万年分も備えて天体を旅行するといたします。そうしますと、私共が進んで行きます時、やはり種々大宇宙の光景が見えて参ります。四百マイルも行きますと暗黒であるそうであります。暗黒であ

りまして、覚っているのであります。その見え来り、見え去る、その眼界はすべて見る主、聞く主としての自己であります。

そのように大宇宙は本来そっくり見る主、聞く主としての自己であります。ですから宇宙が自己となることと有り得るのは当然であります。この死なない自己、大我が分からない間は迷いであります。この大我に目覚めましたことを「無礙光中の人となった」と申します。知る主としての自己は宇宙大であるということに就いてお分かり下さいましたでしょうか。平凡な事実でありますから、どなた様も御異存ないことと思えます。この大我に目覚められました例として、前に原青民上人の事をお話しいたしました。原上人が何もかも自己の内に見え、聞こえるようになった。風の吹くのも、水の流れるのも自分の心の働きとして事実直感されるようになったと申しました。その自己とはもはや小我ではなく、天地全体を自己とする大我であります。事実は不思議であります。

知らるるものはたくさんあります。歴史の事、地理の事、植物の事というように、その他種々様々な事を記憶しております。けれども、それを知る主という方から申しますと、只一人であります。お母さんの顔を知っている主が友達の顔を知っているのであります。今まで時を異にし所を異にして種々様々なものを見たり聞いたりしてまいりました。けれども、知る主の方から申しますと、いつでも、何処でも同一人であります。見らるる側、知らるる側から申しますと実に種々雑多個々のものであり、その悉くの森羅万象は有為転変のものであります。これを知る主という側から申しますと、いつでも、何処でも同一人であり、只一人であります。

でありますから知る主としての自己、大我は唯一のものでありまして、あの部分、この部分というように分かつ事のできないものであり、いつも変わらぬ在り通しの自己、真実の自己といふことができます。大宇宙は半分なくなるもので、半分はなくならないものというのではありません。大宇宙を尽してなくなるものであり、またなくならないものでもあります。これを仏教で「中道」と申します。「法性無漏の大海には不変随縁の波の立たぬ日ぞなき」であります。

「法」と申しますと、森羅万象のことでもあります。「性」と申しますと、変わらない所という意味であります。「漏」とは煩惱のことでもあります。大宇宙は一面から見ますと、不変のもの、変わらないもの、なくならないものであり、また縁に随ってなくなるもの、変わるもの、変化するものと現れます。この不変のものに目覚めた人、大我となった人を「無礙光中の人」というと先程申しました。如来様の清浄光及び智慧光にすっかり照らされますと、永遠死ぬ事のない自己に目覚めてまいります。それで弁柴聖者もお詠いになつておられます。

我といふは絶対無限の大我なる無量光寿の如来なりけり

さあそういたしますと、もともと私共は大我であります。でありますから、私共は無量光寿の如来様でありましょうか。そうではありませんですナ。私共の事實はやはり小我としての我だけにしか気が付いていないのが私共の事實であります。パタツと音を聞いて直ちに言い得るところ、気の付くところは音ということであります。いかにもそれが覚りであるということは今まで段々と考えてまいりまして分かつてはおりますが、音を聞いて、それが覚りであるということに気が付きますのに時間を要します。なぜこの覚りということに

直ちに気が付かないのかということ。『瑜伽論』に「人は言葉を用うるために、どうしても象の処ばかりに気が付いて、なかなか覺りに気が付かないのだ」と言っております。私共はやはりまだ大我になりきっていないのでありますから、如来様だということできません。

このたびのように事実と首っ引で覺りというものが、変わらない我というものを発見しただけでも、禅宗では悟りが開けたと申します。しかし、喜ぶには及びません。悟りには相違ないが、いかんせん小悟であります。白隠禪師が「大悟十八遍、小悟その数を知らず」と言っておられます。いつもいつも了々として目覚めているのではないと、いざという場合に役に立ちません。屋根から転げ落ちても、落ちない自分が目覚めているようでないとい役立ちません。屋根から転げ落ちる時、「ちよつと待ってくれ、眞実の自己は、この音のする所にある覺りだ」などと考えているようでは間に合いません。三昧の心をもって大我に合一すれば、もうその時こそ死ぬ事のない自分であります。そうなたた処を無量光寿の如来様になつたと申します。

デカルト (René Descartes 1596~1650) でありましたか「我思うが故に我あり」という有名な句があります。ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel 1770~1831) もやはり覺りということを認めておりましたけれども、それで止つてしまつたんです。カントも覺りというところに気が付いておりました、これを「一般意識」と名付けておりました。けれどもそれが「眞実の自己である、大我である」という処までは進展してはおりませんでした。ただそれだけに止まつてしまつたんです。実に惜しい事であります。デカルトでありまして、ヘーゲルやカントでありまして、仏教の恩恵に浴しませば、もつともつと進展して、やがて修行して大我に目覚めることに努めたかも知れません。実に惜しい事をしました。仏教を

知りませんでしたので、そこまでで止まってしまいました。

禅宗では「参禅は須らく心、意、識を超越しなくてはいけない」と申します。禅宗に参りますと、一心に坐禅を組んで修行をしておりますと、最初は熱いか寒いかという識別、すなわち「識」がありますが、段々修行して参りますと、そのうちに暑さ寒さは感じておりますが、ただ感じているだけで、すなわちそれが「意」であって熱いもの、冷たいものという識別はされなくなつてまいります。なお一心に坐禅しておりますとその感じさえなくなつて、後はカラリと晴れた純粹空間ともいうべき状態だけになつてまいります。これを「心」と申します。なお進みまして、その心のなくなつた所を「昏昏々」と申します。空間さえもなくなつて、何もかも覚らなくなつた処であります。

なお進みますと、ハッと気が付きます。そのの処はもう覚りだけになりきつた処であります。さめさめ、明々としておる処であります。これを「根本智」と申します。ここを「眼を瞑つた」と申しております。鎌倉などの禅宗のお寺に参りますと、御飯を食べ、立派に働いている人が「何も無い、何も無い」と言つている人があります。そのさめさめ、明々としておりますそれを失わずして、差別を見得るようになってまいりました処を「後得智」と申します。そういったしますと、米粒の中にも大宇宙を見る事ができるようになつてまいります。

ある時には無差別の方面だけに目覚めており、ある時には差別の方面だけに目覚めている時期があります。その処を「背面相反」と申します。差別と無差別とが全く融合してしまいました処を「当体全是」と申します。私共は眼を開け通しに開けておりますけれども、「一度眼を瞑つて後、眼を開けなくてはいけない」と申

します。私共、いつも差別の方面だけに気が付いていて、無差別の方には少しも気が付きません。また無差別の方だけに気が付いていて、差別の方に気が付かない時があります。これはどちらも担板漢であります。宇宙の一面だけしか目覚めていない者でありますから担板漢であります。けれども私共はその無差別に気が付いて、すなわち一度眼を瞑って、それから眼を開けるとよいのであります。この平等無差別の処が見る主、聞く主としての自己、真実の自己と言わるべき処であります。

禅宗では慧眼開けて大我に目覚めることを当面の理想とします。それで、この「真実の自己」を言い表すのに種々の言葉をもって痛快に大我のことを言い残してあります。それで大悟徹底の禅師様のお言葉を二、三申し上げることにいたします。

禅宗では古来この処を、「父母末生以前本来面目」と言っておりますが、また臨済宗の祖師臨済義玄大和尚のお言葉を集録しました『臨済録』の中に「仏は何処にありや」という問に対して、

汝目前聴法底人。(汝が目前聴法底の人)

と答えてあります。すなわち「お前の眼の前の音を聞く主人公だ」ということであります。前には私共は、音を聞く主は頭の中にあると考えましたが、只今はもう、そのようにはお考えになりませんでしょう。音を聞く主は音のする所にある。それは大我で、いつも変わらぬ在り通しの自己であります。それを指して「仏は何処に居るか」と申しました。「仏は何処に居るか」というと、お前の眼の前の音を聞く主人公だ」とお答えになった訳であります。

またこの『臨済録』の中に、

是汝四大色身、不解說法聽法。脾胃肝胆、不解說法聽法。虛空不解說法聽法。是什麼解說法聽法。是汝目前歷々底、勿一箇形段孤明、是這箇解說法聽法。(是れ汝が四大色身、說法聽法を解せず。脾胃肝胆、說法聽法を解せず。虛空、說法聽法を解せず。是れ什麼ものか說法聽法を解す。これ汝目前歷々底、一箇の形段勿うして孤明なる、是れ這箇、說法聽法を解す)

とあります。「四大」と申しますと、四通りの原素ということでありまして地、水、火、風のことであります。地と申しますと、固さあらしめるもの、水と申しますと、潤いあらしめるもの、火と申しますと、暖かさあらしめるもの、風と申しますと、動揺あらしめるものという意味であります。今日でありましたならば、十七原素と申すであります。「色身」とはこの肉体のことです。「形段」と申しますと、この身体のことです。私共の身体には頭、肩というように段がある形をしておりますので、それでこの身体のことを形段と申します。「孤明なるもの」とは、形段と二人づれであります。ただ孤でありますから、「一箇の形段なくして孤明」であります。「這箇」と申しますと、「これが」という意味であります。そういたしますと全体の意味を申しますのに、「說法聽法」を「音を聞く」と簡単に置き換えて見ますと意味が分かり易うございます。

そういたしますと最初の一句は「お前の身体が音を聞くことができる訳でない」ということになります。普通の考えでは身体や、頭の神経細胞が音を聞くと思っておりますが、そんな事はあるものか、という意味であります。「そうかといってお前の内臓(脾胃肝胆)が音を聞く事ができる訳ではない。空間が音を聞く事ができる訳でない」。次句は「それでは何が音を聞く事ができるのか」というと、お前の眼の前のハッキリハ

ツキリしたもの(歴々底)、一箇の身体(形段)も何もなく、独りぼっちのハッキリハッキリしたもの(孤明)、すなわちこの覚り、こいつ(這箇)が音を聞く事ができるのだ」という意味であります。お前の身体や耳や神経系統が音を聞く訳でない。そのお言葉はいかにもうれい事ですナ。事實は平凡なことであります。この平凡な事に気が付けばよいのでありますが、我々はあまりに利口過ぎるのでしようカナ。

「伝光録」という書物の中に、——「伝光録」と申しますと、曹洞宗の大本山であります総持寺の第一代瑩山禪師様のお言葉を集録したものであります。その御書物の中に、

諸人、言なきのみにあらず、又口なきものあることを知るべし。豈に口なきもののみならんや、眼もな
く四大六根、本より一毫もなし。是の如くなりと雖も是れ空なるに非ず。物なきに非ず。謂ゆる汝等物
を見るも声を聞くも、此の眼の見るに非ず。耳の聞くに非ず、是れ箇の無面目の漢の如是なるなり。
と痛快に大我の事実をお述べになっております。

なおこの事に就きまして、禅宗の経にありません言葉を挙げて説明するとよいのであります。時間がありませんので省くことにいたします。禅宗の経には実に痛快を極めた言葉でこの「真実の自己」に就いて説いてあります。

この事に就きまして、釈尊はどのように言っておられるかと申しますと、「ウダーナ」という経に次のよう
にお説きになっておられます。「ウダーナ」と申しますと、無問自説の經典として尊ばれている經典であります。「無問自説」と申しますと、こちらからお釈迦様に出問して、それに対してお答え下さったものではありま
せん。釈尊御自身の悟りの心境をお漏らしになったものでありますから、少しの方便もありません。真理を

そのままお説き下さったものであります。どうしても出問にお答え下さったものでありますと、対機説法でありますからその人、その人によって方便をお説きになります。けれども無問自説でありませば、方便を用うる必要ありませんから事実の通り、その真相、真理をお説き下さったものと信じられます。「ウダーナ」と申しますと、無問自説の經典として有名であります。

この「ウダーナ」の中に涅槃の風光をお説きになったものとして有名なお言葉があります。涅槃の境界とは「物も、心も、苦も、楽も、遠く離れた遠離楽だ」と言っておられます。また「無生、無願、無作、無集のものあり。もし無生、無願、無作、無集のものなくんば、現世に生まれ、願れ、作られ、集まりたるもの遠離あるべからず。しかるに無生、無願、無作、無集のものあるが故に、現世に生まれ、願れ、作られ、集まりたるもの遠離あるべきなり」とお説きになっておられます。

「無生」と申しますと、私共は生まれたものであります。が、「生」とは元なかつたものからできたものであります。でありますから無生とはできたものでない元々あるもの、自存するものという意味であります。「無願」と申しますと、「願」とは「あらわれる」ということであります。無願とは願れることないものでありますから、滅する事もまたないものであります。「無作」と申しますと、私共は種々の原因によって作られたものであります。父母がなければ私共は有り得ません。また十七原素等なければ、私共は有り得ないものであります。自分勝手にこの世に出て来たというのではありません。作られたものであります。

「無作」と申しますと、その反対であります。種々の原因によって作られたものでないもの、自存のものという事であります。「無集」と申しますと、私共は種々のものの集まったものであります。十七原素の集ま

つてできたものであります。無集と申しますと、集まつたものの反対であります。でありますから無生、無頭、無作、無集と申しますことは、大我ということであります。大我と申しますと、大宇宙ということでもあります。大宇宙と申しますと、この部分、あの部分というように分けることができるように思われまふけれども、大我は分けることのできない一つであります。でありますから無集であります。大我は部分の無数に集まつたものではありません。「遠離」と申しますと、解脱ということであります。

また『パーラヤナ』という経文に、この大我ということに就いてお説きになっております。『パーラヤナ』と申しますのは、現代の自由討論、歴史的研究等によつて釈尊がお説きになつたに相違ないと學者によつて確かめられております經典であります。実に尊い經典であります。『パーラヤナ』は英文に訳されております。私は英語などよく分かりませんが、その私がこの英文をまた訳したのでありますから、分かり難いかも知れません。そういたしますと、悟りが得られたとはどういうことなのかと申しますと「隠れたる彼にとりては相すがたかたち形あることなしいま。人々捉ゆまえて彼在すといふべき所以のもの彼には既に存せず」と言つておられます。

これはある時、釈尊にお尋ねしました。「生まれ変わり、死に変わりする事のないようになった人は、心のない人なのでしょうか」とあるお弟子が出問いたしますと、釈尊は「心の有無どころではない、心と身体よりもぬげ落ちた人だ。それ故にそもそもその人ありと言えない」とお答えになりました。この場合、「心」とは憎む心、悲しむ心、喜ぶ心というような心を指して言います。

皆さんに見えているこの笹本は、生まれ変わり、死に変わりする事のない笹本ではありません。「此処にこ

の人あり、あの人あり」と言い得らるる笹本であります。しかし、生まれ変わり、死に変わりする事のないようになつた人とは、心と身より解放されて大我となつた人のことであります。純粹覚りとなつてしまつて、大宇宙を自己とした人であります。「此処にあり、そこにあり」と言い得ない人であります。それでお弟子がまた「生まれ変わり、死に変わりする事のないようになつた人は、虚無となつた人か、それとも隠れた人か」と出問いたしますと、釈尊は「隠れたのだ」とお答えになりました。ただし隠れたとは、この五感をもつて認める事ができなくなつたのを言います。この目で見える事も、この手で触つてみる事もできません。それで釈尊は「隠れたる人は相形あることなし。人々捉えてその人ありといふべき所以のものなし」とおっしゃつたのであります。これは釈尊直々の御說法のお言葉であります。

大我と小我との關係を「大涅槃經」に「我と無我とは性無二」と説いております。「性」と申しますと本体ということであります。「無二」と申しますと二つ別々のものではない、一つものだけということでありまして中道であります。パタツと音がします時、音と覚りとは各々別のものではない。本体は一つであるといふところを中道と申します。

大我と小我との關係はちょうど水と波とに譬えることができます。先輩の方々も水と波とに譬えてお説き下さいました。「起信論」などを拝読いたしますと、やはり水と波とに譬えて説いてあります。私もやはり先輩にならつて波と水とに譬えてお話しいたします。

私共が海岸に参りますと、種々の波が打つております。ドドーパツサリと打つ逆巻く怒濤もあります。山のような大波もあります。また岩に当たつて玉と碎ける美しい波もあります。またかわいい漣もあります。

実に波という側から見ますと、千差万別で一つとして変化しないものはありません。ドドーパツサリと落ちる波を見て、そこに波があると言おうとすると、早くもすでに消えてなくなってしまう。実に波という側から見ますと有為転変であります。けれども波はなくなっても水はなくなつた訳ではありません。ちょうどそのように、この自然界は何一つとして常住不変のものといつてありません。実に有為転変の波に譬えることができます。けれども見る主、聞く主という側から見ますと、不去不来、不一不異、不常不断、不成不滅であります。常住不変であります。

平生私だと気が付いておりますこの小我は、波のようなものであつて、なくなつてしまふものであります。けれども小我の波に譬えられる波はなくなつても水はなくなりません、その水に譬えることのできる自己がある。それは大我であります。

釈尊金口の直説として尊ばれておる經典の一つに『如是語』という尊い經文があります。この經文は本当にお釈迦様がお説きになつたまゝを伝えたもの、すなわち後世の付け加えなど少しもないということに就きまして、現代の学者一人も異論のないチャキチャキの正真正銘のお釈迦様のお言葉であります。お釈迦様の直説でない、お釈迦様がお隠れになつた後にできた經文や、仏教小説や、仏教哲学がたくさんあります。ところがこの『如是語』のお言葉は実に生粹のお釈迦様のお言葉であります。パーリー語で『イティヴツタカ』と申します尊い經典でございます。これは九分経の一つだと言われておりますが、その三分の二は普玄梵三蔵が支那の言葉に翻訳して『本事経』といい、残りの三分の一は英語とドイツ語に翻訳できています。その後者の中にあるお言葉でありますが、

比丘よ不生、不成、無作、無為あり。もし不生、不成、無作、無為なくんば彼の生、成、作、有為の依処なかるべし。しかるに比丘よ、不生、不成、無作、無為あるが故に、生、成、作、有為の依処ありと知るべし。

とあります。

「生」と申しますと、生まれるということでありまして、生まれるとは元なかつたものが初めて有るようになったことを申します。私共も元なかつたものであります。その元なかつたものが初めて有るようになったのであります。

「成」と申しますのは成就したものの、段々でき上つたものということでありまして、幼少から少年に成る。少年が青年に成り、青年が壮年に成る。壮年がやがて老年に成る。そしてとうとう死んじまつたというように「成」ということは変化することです。

「作」とは他によつて作られたものということです。私共は父母によつて生まれ、またこの身体は宇宙が提供する十七原素によつて作られ、さらに前の世の業と煩惱とによつて作られたものであります。すなわち私共は他によつて作られたものであります。他によつてかくのごとくあらしめられたものであります。それ自身自存したものではありません。

「有為」と申しますのは、為とは作るもの、原因ということでありまして、でありますから有為とは物を作るべき原因をもっているものということでありまして、私共は原因をもっているものであります。宇宙の十七原素、前の世の業と煩惱、また統一的主体等を原因としております。宇宙の種々の現象は皆その現象を

あらしめる原因をもっております。従つて私共が日々経験しております森羅万象は悉く有為であります。私共平生認めて自己だと思つておりますこの私というものも、元より在つたものではありません。他によつて生まれたものであります。変わる者であります。そしていろいろな原因をもつてゐるものであります。いつまでも若くはありません。皺ができて段々腰が曲つて、とうとう死んでしまふ。私共が今現在自己と認めてゐる自己は生まれたもの、変化するものであります。従つてこの身体はもちろん、この心も何処にも変化しない所ありません。この事は御同様に生理学、物理学の片端でも学びますとすぐ分かります。

お釈迦様は私共には「変わる所と変わらない所とがある」とおっしゃいました。私共の何処を擱えてみても変わらない所といつてはありません。私共が平生これが私だと思つてゐる私には身体の方を考えてみても変わる所ばかり。心の方を考えてみても変わる所ばかりであります。

しかるにお釈迦様は私共には「変わる所と、変わらない所とがある」とおっしゃいました。けれども一往考えると段々御一緒に觀察いたしました通り、私共には変わらない所はないように思える。しかしながら再往念を押しして仔細に考えてみますと、私共には確かに変わらない所があります。この変わらない所をお釈迦様は「不生、不成、無作、無為」とお仰せになつたのであります。

それで、「不生」と申しますと、生まれないものでありますから、元より在るものといふことであります。「不成」と申しますのは成らないものでありますから、変化しないものであります。幼年が少年に成り、少年が青年に成り、青年が壮年に成り、壮年がやがて老年に成つて、とうとう死んじまつたといふような事を成るといふのであります。地球も元は八万度もの熱い火の塊であつたものが、このような現在のような地

球となり、花も咲けば鳥も囀るといふようになります。こうなることを成るといふのであります。しかるにそのように成らないといふのでありますから、元より在るもの、自存するものでありまして、生まれぬもの、すなわち変わらないものであります。

「無作」と申しますと「作」の反対であります、作られないもの、他によつてあらしめられたものでないもの、自分で元より在り得たものであります。父母等がなくても自分で在り得たもの、自存したものであります。

「無為」とは原因をもつていないもの、自分自身で本来在り得たものといふことであります。つまりこの不生、不成、無作、無為といふことは、いつも変わらぬ常住のものといふ事であり、生、成、作、有為とは無常のものといふことであります。

そういたしますと、『如是語』のお言葉の全体の意味を申しますと、生滅変化絶え間ない無常のものは、不生、不滅の常住なるものがあればこそ起る事ができるのであります。すなわち常住なるもの（水）あればこそ無常なるもの（波）が起る事ができます。もしも、常住なるもの（水）がなければ、無常なるもの（波）は起りません。しかるに、この世界の有様を見ますと生滅変化絶え間ない無常なるもの（波）が充ち満ちております。故にその依処となるべき常住のもの（水）がなければなりません。この常住のもの（水）があるからこそ無常なるもの（波）の依処があるのだといふのであります。その常住のもの（水）と無常なるもの（波）とは離れた別々のものではありません。不即不離の関係にある一体の両面であります。この部分は波でない水だからといって、水を取つてしまえば波はなくなつてしまいます。そのように常住のものと無常

のものとは不即不離であり、一体の両面であります。

無常であります小我と、常住であります大我とは、ちょうど波と水とに譬えることができます。けれども、もちろん大海の水も小さな水の無数の集まりでありますから、こちらの部分の水と、向こうの部分の水とは違います。しかし、大我は部分部分に分かつことができません。全体を尽して一つであります。ですから此処まで来ますと、この譬えも不十分でありますが、ちよつとこの大我と小我とを譬えますのに、波は変わつても水は変わらない。その変わらない、なくならないという処だけを申しますのに分かり易うございませうから譬えた訳であります。ですから譬喩に就いてとやかく言つてはいけません。

不生、不成、無作、無為という方は水に譬えることのできるものであります。普通「我なし、我なし」というのはこの現象我に就いて言つているのであります。小我の波はなくなつても、大我の水はなくなりません。従つてこの大我の水の表面に、もし風が吹きつければ、また別の小我の波が起こるに決まつております。風がなければ、水だけあつたのでは波は起こりません。それじゃ一体この小我の波を起こすものは何か。そして何処にあるのかと申しますと、実にその風は私共が自から日々夜々新しく新しく造つているのであります。それを業と煩惱と名付けます。

「業」とは「わざ」ということでありまして、御承知のように私共の人格の中心は何かと申しますと「習慣的意志活動である」と学者は言つております。たびたび腹を立てておりますうちに、遂に腹立ちが習慣性となつてまいりますと、他人がその人を見ますと、あの人は腹立ちっぽい人だという事になります。このように何々つぽくなりました所が業であります。酒飲みでありますとか、また煙草を喫む人でありますと、たび

たびそれを繰り返えしておりますうちに、舌がこうひとりでに酒を飲む時、煙草を吸う時の運動を起こします。そうしますと、もう酒が飲みたくてしかたがなくなる、煙草を喫みたくて仕方がなくなるという訳であります。このようになりました所を業と申します。

昔から継子はどうも憎いものらしゅうございます。御列席の皆様の中にはそのような方はおいでにならない事と信じておりますが、継子は憎いものらしゅうございます。よく新聞などを見ますと実に残酷な事実が載っております。いたいけな子供の着物をめくつて見ますと、もう生傷の絶え間がないというような事が事実あるんですナ。一度憎らしいと思つては虐め、また憎らしいと思つては虐めますうちに、遂には鬼のような心が習慣となつてまいります。このように習慣となつてまいりますと、それを業と名付けます。そして業が原因となつて煩惱を起こし、またその煩惱が原因となつて次の業を作つて行きます。つまり業と煩惱とは私共銘々がこうして生きております間に、この波がなくなつても、次の波を起こすべき風として日々夜々造りつつあるのであります。この風が大我の水に吹きつけて次の波を起こします。すなわち前の波がなくなつて、次の波が起こつたことを私共は「生まれ変わった」と言います。

それで私共の現在のこの身体が死んで、次に生まれ変わる時の姿、すなわち今度起こる波は一体どんな形をしているのか、私共には分かりませんナ。むろん如来様は三世の道理を知つていらつしやいますからお分りになりますが、私共凡夫には分かりません。それは芋虫である事もある。狼である事もある。人間である事も、また天の神々である事もあります。今の現在の形は人間と言われる波であります。犬、猫の形をする事もある。また鬼の形をしている事もある。また餓鬼の形をしている事もあるというようにおよそ六通り

の形がありまして、このおよそ六通りの形をとつて生まれ変わり死に変わりいたします。それを「六道輪廻」と仏教では申します。

「六道」と申しますと、いわゆる地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上のことであります。「輪廻」と申しますのはちょうど車の輪がぐるぐる回るように、およそこの六通りの処を私共はぐるぐる回りするというであります。この小我の波はなくなりますが、それだけで終わる訳ではありません。次の波が起こります。どんな波が起こるのか。どういふふうにしてできるのか。その波の形はおよそ六通りのものがあつて、およそこの六通りの形をとつて死に変わり生まれ変わりするのだと申します。

けれどもどんな波になつても水は水。水でないものになつたのではない。それと同じように、どんな形のものに生まれましても、大我という所に変わりありません。

この一生の間に善い事をする、悪い事をする。そのする主が、こんど別の波になつてもその報いを受ける主となつて生まれて来る訳であります。小我の波が悪い事をする、善い事をする。その小我の波はなくなつても大我の水はなくなりませんから、風が吹きつけさえすれば別の小我の波ができます。けれどもその前の波の水も、今現在の波の水も同じ大我の水であること、ちつとも変わりありません。ですから悪い事をした主が悪い報いを受けるということは当然であります。仏教で「自作自受、他作他受」と申します。因果応報と申します。事実さえ分かれますと、こんな分かり易い事はありません。この「自」という所は、先日来お話し申し上げております大我であります。自分が悪い事をする、その報いはやはり自分が受けるのであります。自分が善い事をすれば、その報いはやはり自分が受けるのであります。それで自作自受と申します。こ

の「作」という所はいろんな原因で起こるところの波であります。他がすれば他が受ける故に他作他受であります。

このようにして現に私共は次の波を起こす風となるべきものを、日々夜々造りつつある訳であります。従つて波はなくなつても風がなくならない以上、また別の波が起こらざるを得ない。すなわち生まれ変わりに変わりする事あるべきはずであります。このようにして私共は無始以来生まれ変わり死に変わりして六道輪廻を繰り返して来た訳であります。しかし、私共一心にお念仏して如来様のお光明を心に頂くようになりますと、大我が得られてまいります。もう六道輪廻などという愚かな事はなくなり、解脱を得させて頂くことができます。この事に就きまして、もう一つ警諭をもつてお話し申し上げたいと思います。

私共先般来段々と御同様に考えてまいりまして、すでに皆さんは変わらない所があるということは確かにお突きとめ下さったことと思ひますが、さて振り返つて果してその変わらない所に気が付いているか、すなわちこの真我、大我が常平生の目覚めたる自己となつてゐるか、という左様ではありません。一体自分の事であるのに、何故それがなかなか探し当らないのか。大我は南洋へでも行かなければ見る事できないというものじゃありません。しかるに自分のものでありますのに、なかなか探し当りません。仏教で「一切唯心」と説くということもすでに屢々お話し申し上げました事でありますが、事実よく気が付いて見ますと、この黑板も心であります。太陽でも、月でも、山でも、川でも、乃至天地万物悉く心でないものではありません。通常私共が物質とのみ考えておつた森羅万象も、この透き通つた明るみも一切は心であります。しかるに私共はこの事実に気が付いておりません。天地万物とのみ考えていた訳であります。

この現状を一つ譬喩をもって申しますならば、私共の心は金鉱のようなものであります。すなわち金山から掘りたての鉱あらがねのようなものであります。それは純金が未だ不純物と化合しておる状態であります。ですからその金鉱をいくら割って見ても純金は見えません。しかし熔た鉱た炉ろにかかると純金が分析し出されて、山吹色の純金が出てまいります。ちょうど大我が私共においては未だ他の不純物と化合した状態であるために、どうもいくら自分の心を探してみしても、いつも変わらぬ在り通しの我、すなわち大我と言われる所が分りません。しかるに私共一心にお念仏いたしますと、如来様の御恵みのお光明を心に頂くことができます。すなわち慈悲の火を心に頂くことができます。

言いかえますとちょうどその時、鉱の心が如来様の慈悲の火の炉にかかって大我の純金を吹き分けて頂くのであります。この純金が分析し出された時、ハッキリと真実の自己、すなわちいつも変わらぬ在り通しの我を見出すことができます。その時の自己は大我でありまして、実に大宇宙であります。この大我に目覚めませば、もうそれは永遠に死ぬなどという嫌な事のない永遠の生命と常恒の平和とであります。六道輪廻などという愚かな事のない命であります。

そういたしますと、この大我に目覚めたる自己となつたとは事実どんな状態の事をいうのか、すなわち大悟徹底とはどんな事をいうのかということに就いてお話しいたします。

達磨大師が支那へ来て坐禅をしておりました。そういたしますと、ある日、慧可という者が達磨大師の所に参りまして「どうぞ弟子にして下さい」と申し入れました。けれども大師は何とも返事をしませんで、向こうを向いて黙って坐禅を組んでおります。とうとうその日も暮れ、次の日も暮れましたがお許しが出ませ

ん。そのうちに雪が降ってまいりました。慧可の身体に雪がどんどん積ってまいりました。そのようにして外で待つておりましたが一向に弟子にしてやるといってお許しが出ません。

それで慧可は自分の決心を示すために自分の腕を切つて達磨大師に示しました。大師もこれほどまで強い決心をもっているならば大丈夫とお考えになったのでありましょう。それでやつと弟子になる事を許されました。そのようにして一心に修行をしておりましたがなかなか大悟したというお許しが出ません。それで慧可がいろいろと修行をして、自分が得た心の境界に就いて大師に申し上げました。

「我既息諸縁」「縁」とは伝わることであります。伝わるとは気を付ける事であります。「攀縁」という熟語もありますが、「我既に諸縁を息む」とは、何ものにも注意する事なくなつた、何にも縁えんわる物がなくなつたということであります。物を見ます時、皆様の注意が此処に通うのであります。何物にも心の通わない時、働かない時、私共は寝ている時であります。私共はぐつすり寝込んでおります時には布団の中のぬくとも感じません。

そういたしますと、達磨大師が問い返しました「莫成断滅去」「否」と申されました。「何もなくなつてしまいはせぬか。ぐつすり寝込んでしまつていてのではないか」と申されました。そういたしますと、慧可が「不成断滅」と答えました。「いいえ、何もなくなりません」と答えました。そういたしますと大師は、「何以為驗」、すなわち「では何を証拠としてそういうのか」と達磨大師が申されますと、慧可は答え、

了々 常知。故言之不可及、

すなわち「はつきりが覚つております、それは何とも言いようがないものです」と申しました。そうしますと

此是諸仏所証、心体。更勿疑也。

すなわち「それが仏の本体だ」と言つて初めて大悟のお許しがありました。これが覚りであります。この事に就きましては、まだ種々と歴史に出ております。

柳生但馬守でございましたか、三代將軍家光公のお抱えになりました劍術の指南役でございます。ちょうど澤庵禪師も御在世の時であります。ある日、朝鮮から三代將軍へ一匹の虎が献上されました。三代將軍は大変気の荒い方であつたそうであります。それで家光公が柳生但馬守に向かつて申されました。「お前は劍道の達人だから、獣にも負けるような事はあるまい。獣に負けるようでは劍道の達人とはいえない。ひとつ虎の檻に入つて見さっしゃい」という仰せです。どうもよんどころないものですから但馬守、鉄扇を持つて、こうやつて段々虎の側へ寄りました。さすがに虎はたじろいだという事です。そこで家光公感心遊ばされました。

すると澤庵禪師たまたまお傍におられて、それを見て笑つておられます。それで但馬守腹を立てました。それはそうでしょうナ。せせら笑つているのですから腹を立てるのも、もつともであります。それで但馬守が言いますのに「失敬じゃありませんか、せせら笑うなんて。それじゃ、あんた入つて見さっしゃい」という訳であります。そういたしますと、澤庵禪師ニコニコ笑いながら尻はしよりをして、虎の檻の中に入つて参りまして、側へ行つて虎の頭を撫でてまた出ていらつしやいました。だいぶ違ひますナ。とうとう劍道の

達人も澤庵禪師の教えを乞うようになりました。それで澤庵禪師が但馬守に教えられたと伝えられております。

どういふ事を教えられたかと申しますと、「前から切り込まれると、それに心が執とまわれるようでは後の方が空きとなってしまう。だから後から来て切られてしまう。どうしても心が執とまわれるという事はないようにならなくてはいかん」と禪師様はお教えになりました。名人になると心はいつでも何処でもあります。こう刀を受けると、心がその方に伝わってしまつて、他の方が空になるといふ事はありません。但馬守一心に修行して、その剣に執とまわれる事がなくなり、本当の剣道の名人になつたといふ事があります。

「了々常知」の境界は尊とまくして尊とまい訳であります。段々お話し申し上げましたように、了々常知の境界は何の對象もありません。何の内容もありません。しかもぐつすと寝込んだのと違います。ただハツキリハツキリいつも覺とまつていふ所を大悟徹底と申します。それが諸仏の体であると言います。大体お分かりになりましたでしょうか。覺とまりは大宇宙を尽して余す所ありません。本當の我「いつも変わるぬ在り通しの我」であります。「大」と言いますと、部分に分けられそうに思われますけれども、事實は決して分けられない。分かつべからざる一つの我、そういうふうになつた処を涅槃を得たと申します。

「色即是空、空即是色」と申しますと、「般若心経」の中のお言葉であります。どういふ事を説いているのかと申しますと、縮めれば空といふことの一字であります。これを少し広げれば、「色即是空、空即是色」となります。色とは仏教では物質的のものを申します。色、音、香、味、触等でありますから、色というのは差別であります。千差万別の色が「即是空」とは、とりもなおよさず無差別平等であるといふことであり

ます。ちょうど水と波とに譬える事ができるとたびたびお話し申し上げました。いかがでありましょうか、お分かりになりましたでしょうか。

(上人) 池末さん貴方がですか、お分かりになりましたでしょうか。

(池末) 永遠の生命があるにはあると考えられますが、どうもピンときません。

(上人) ああそうですか、それで結構であります。ピンと来た時は永遠の生命に目覚めた時であります。けれども、そういう事はあり得べしとお考えになりますでしょうか。ハア、それでこのお話の目的は達せられた訳であります。

仏教はどうも訳の分からぬものだとお感じになったであります。理屈で考えますと、なかなか分かり難うございます。けれども如来様のお光明を心に頂きますと、もう目前の事実であります。理屈を考えますことは難かしゆうございますが、お光明を頂いて如来様に分らせて頂くことは易うございます。

私も全国処々方々に参りますと、お念仏申して永遠の生命に目覚められた方が段々とおいでになります。目覚めて見ませば目前の事実であります。いかがでしょうか、今までお話ししましたことは私の opinion であるとお考えになりますでしょうか。意見ではいけませんですナ。それが事実でなければいけませんですナ。

(おわり)